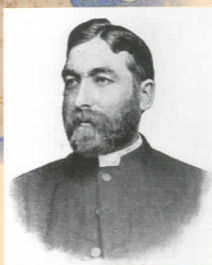


# イングランドから 北海沿岸文化を訪ねよう

ヴァイキングの歩みとともに

## 第2回 中世の神話から現代の神話へ

カンブリアの教区教会 (2) 伊藤 盡 Ito Tsukusu (信州大学准教授)



Rev. W. S. Calverley  
(1847-1898)



カルヴァリーの作らせた十字架のレプリカのある  
アスペイトリア教区、St Kentigern 教会



カルヴァリーが最初に牧師を務めたディアラム  
の St Mungo 教区教会入り口



ゴスフォース教区、St Mary 教会



ゴスフォースの十字架

### ゴスフォースの十字架

1881年の秋、それまで数週間降り続いた雨が、石を覆う緑の苔を柔らかくしてくれていた。灰色の低い雲はまだ空を覆っていて、空気はねずみ色にくすんで見えた。それでも、直線距離にして30キロ強、海岸線をぐるっと巡るローマ街道に沿えば40キロ離れた村ディアラムで教区教会牧師をしていたウィリアム・スレーター・カルヴァリーは、彼と同じくカンバーランド・ウェストモアランド考古好古家協会のメンバーであるチャールズ・パーカー医師と並んで、心の高まりを覚えながら、濃緑色の砂岩でできた1本の背の高い十字架の前に立っていた。

ここはカンブリア西南部。海岸線から少し引込んだ谷間の平地にある村ゴスフォースの教区教会墓地である。脚立に乗ってブラシで丁寧に十字架頭部の苔を掃いているのは、パーカー医師の馬車の御者、今で言うお抱え運転手だ。つい数カ月前になる7月8日に考古好古家協会のメンバーたちがゴスフォースを訪れたとき、この十字架に刻ま

れたイメージについてカルヴァリーは自説を披瀝し、キリスト教と北欧の異教神話とがいかに融合されているかを熱く語った。だが、数世紀にわたって苔むした十字架を見たメンバーのほとんどは、彼の説には懐疑的だった。それまでの人々の考えでは、キリスト教の遺物にはキリスト教以外の宗教が入り込む余地などなく、仏教、ドルイド教や占星術などの神秘主義的な思想の影響を認めることなど不要である、というのが当然と目されていた。

きれいに苔が取り除かれて、砂岩の十字架の上に刻まれたデザインが現れたとき、カルヴァリーとパーカーの眼前には、見事なアングロ・サクソン模様の三位一体を表現する triquetra (三つの頂点を持つ組紐模様) とともに、不吉な獣や神秘的な人物の登場する物語を描いた彫刻がはっきりと浮かび上がったのである。この十字架は、円筒の脚部の上に伸びる、東西南北に四面を持つ角柱の胴部を持つ。それぞれの面には人物画像が彫り込まれ、角笛を持つヘイムダッル神やオージンもしくはヴィーザル神など北欧神話の神々だと解釈される図像が描かれている。





ゴスフォースの十字架の  
「ロキ・パネル」



カルヴァリーによる  
「ロキ・パネル」復元図



アスペトリア教区教会の  
ゴスフォースの十字架の複製



アスペトリア教区教会の  
「ロキ・パネル」の複製



カークビー・スティーヴン教区教会の「ロキ・ストーン」



ヴィクトリア・アルバート博物館の  
ゴスフォースの十字架の複製  
誰も見向きもしない……



M. E. Winge 画のロキとシギン

## 北欧神話の縛られる「神」

カルヴァリーの意見に従えば、その十字架に刻まれた図像の一つは、北欧神話の中で「悪役」とされるロキ (Loki) が蛇の口からしたたり落ちる毒の下に縛られており、ロキの献身的な妻シギン (Sigyn) はその毒が夫の上に降り注ぐのを防ごうと空しい努力をしている、というエピソードを物語る。その後、カルヴァリーの学説は、デンマークのコペンハーゲン大学教授ジョージ・スティーヴンズの後押しもあって、正しい解釈と見なされた。しかしまた、今日では、その図像はキリスト教の縛られたサタンをも含意し、敢えて両方の解釈を可能にしたものだと考えられている。

カルヴァリーは自説を推し進めるにあたり、中世イングランドの職人が用いた手法を研究するため、自分の牧会するアスペトリア教区教会に、ゴスフォースの十字架の複製を作らせた。緑色の砂岩でできたその複製は、同じく複製として今日ロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館に—先月紹介したボーカッスル教区教会の十字架と並んで—

陳列されている珍奇趣味のレプリカとは異なる趣で、カンブリアに住んだ中世の人々の厚い信仰を証明している。

縛られた神秘的人物が描かれた石碑は、カンブリア南部のカークビー・スティーヴン教区教会にもある。この図像を見ると、なんだかキリスト教の悪魔が縛られているようにも見える。イングランドのキリスト教徒は北欧神話の神々を「悪魔」とみなしたのであろうか。縛られる神ロキをサタンと同一視することで、改宗した北欧人にキリスト教の普遍性を教示したのではないかと考える学者もいる。

## アングロ・スカンディナヴィア十字のデザイン

ゴスフォースの十字架は、交差する十字に円を組み合わせる、いわゆるケルト十字を発展させたものだ。一般的なケルト十字に比べて小さなアングロ・スカンディナヴィア十字の円や怪物の体に描かれた編組模様は、アングロ・サクソン人の組紐模様とも異なる北欧のデザインを取り入れたものとなっている。





クロス・キャンノンビー教区教会、十字架胴部



ディアラム教区教会、ケンネス・クロス  
アイルランドの聖人ケンネスの生涯を描いている。



ディアラム教区教会、不思議な十字架

北欧神話の世界樹ユグドラシルを表しているのではないかと、との説がある。



ゴスフォース教区教会内の  
のホッグバック  
「戦士の墓」と呼ばれる。

アスペイトリアから海岸線を巡るローマ街道に沿って5キロほど西に向かうとクロス・キャンノンビーという小さな村に着く。小さな教区教会の入り口には十字架の破片が置かれている。ゴスフォースのドラマチックな十字架に比べればより簡素とも見えようが、朱の砂岩に描かれた動物の首は後ろにひねられて自分の胴体を噛む。右向きと左向きの獣が交互に重ねて描かれる、ノルウェーの様式を用いた美しいデザインである。

一方、カルヴァリーが牧師として勤めたディアラムの教区教会には、異様とも思えるデザインを含んだ十字架や十字架の断片が残されている。8世紀末から始まる北欧の異教徒たちの攻撃や侵入は、百年以上の時を経て、ケルト人、イングランド人、北欧人の混交によって、カンブリアに見事な芸術的意匠という実を結んだのである。

## ホッグバックという アングロ・スカンディナヴィア芸術

十字架のデザインばかりでなく、北イングランドには hogback「豚の背」という名称を与えられた遺物があちこちに存在する。それがどんな実用の目的を与えられていたかには諸説あるが、墓石にあたるのではないかとというのが大方の学者の意見である。ホッグバックにも意匠を凝らした彫刻が残されたが、酸性雨によって溶けてしまったものもある。筆者は、竜の背中のようなデザインで、竜が宝物を守るように墓を守るようなものが原形だったのではないかと憶測したことがある。アディングガムの小さなホッグバックは、教区教会の入り口の隅に掃除道具とともに置かれていたが、弓なりの背中には竜の鱗のような彫刻がきれいに残されていた。

カンブリアは物語性の強いデザインのホッグバックが特に多いところでもある。ゴスフォース教区教会の中には2つのホッグバックが展示されているが、ヴァイキングとイングランドの戦いを描いたのではないかとの説もある、北欧人兵士の行軍を描いたと目される「戦士の墓」もその1つだ。



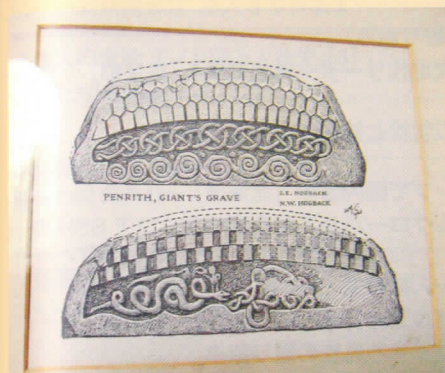


アディングガムの  
教区教会の  
ホッグバック  
掃除道具ととも  
に、入り口脇に置  
かれている。



#### ペンリスの「巨人の墓」

十字架の頭部は崩れ、雨に  
浸食されている。ジョイスは  
ここから巨人フィネガンの葬  
儀をイメージしたという。



ペンリスのホッグバックの絵画  
コリングウッドによる復元画像。



ペンリス教区教会、St Andrews

ペンリスの竜の伝説の画像が描かれていたホッグバック

## ペンリスの「巨人の墓」と神話の継承

カンブリア東北部の大きな街ペンリスにある4つのホッグバックと十字架の石碑は、いつの頃からか現在のよう配置にされて、「巨人の墓」と呼ばれるようになった。4つのホッグバックの1つには中世北欧の竜にまつわる伝説が彫られていた。北欧人は北欧の神話や伝説を中世のカンブリアに持ち込んでいたのである。今は不鮮明になってしまったその絵がどのような竜退治の英雄の物語を描いていたかは、まさに伝説の霧の向こうにある。しかし、この「巨人の墓」の写真を見た文豪ジェイムズ・ジョイスは、その代表作『フィネガンズ・ウェイク』の主人公エリカーもしくはアイウィッカーの前世、太古のアイランドの英雄／巨人フィネガンの葬儀を想起したという。枕辺にはウィスキーの樽が、足下にはギネスの樽が立っているという、ジョイスの巨人の遺体が横たわる図像は、まさにペンリスの「巨人の墓」のパロディだ。ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』は、古

の神話伝説のイメージを随所にちりばめた当代随一の奇書であり、その難解さがつとに知られるが、よもやその冒頭の一節が、中世カンブリアに立てられたこの石碑に端を発していることを知る者は多くはあるまい。まさに、北欧の神話を継承したアングロ・スカンディナヴィアの遺物が産んだ現代の神話とも言えよう。

